

はすいけ

浄土真宗本願寺派

清涼山 西蓮寺

寺報 第二十九号

平成二十五年十一月二十七日(水)

人生のゴール



一度、フルマラソン(42.195 km)を走ってみたいと思つてい
ます。簡単にできるはず無いのですが、何かあこがれのような
ものがあります。最近、「ご法事でこんな話をさせていただきま
す。

人生をマラソンに喩えると、スタートが誕生だと、ゴールは
どこでしょう? どこまで、走れば良いのでしょうか? 「それ
は、臨終です。」と答えるでしょうか。だとしたら、私たちは「死」
に向かって走っているのでしょうか?

人生にも上り坂も下り坂もあります。時にはまさか(坂)も
あるでしょう。追い越し、追い越され、つまずき、転がり、ま
た起きる。まっすぐ走っていたつもりが、いつの間にやら迷っ
っている。この繰り返しでは、ないでしょうか。こんな時、先
にゴールに着いた方々が、「人生のゴールは、浄土だよ。仏にな
るんだよ。待ってるよ。しっかり。」と励まして下さる。

念仏とは、極楽浄土というゴールに着き、仏となった方からの

励ましの声では、ないでしょうかと。

実際のマラソンでも、沿道からの声援は、本当に力になるそ
うです。また、かつて君原健二さんが、苦しくなったら、「あの
電信柱まで、あの電信柱まで」と一本一本の電信柱をたよりに、
走り切ったと話されていました。

親鸞聖人は、「念仏は阿弥陀様の喚び声である。」と明らかに
されました。人生も、苦しくとも走り切らねばなりません。そ
の時々に称える念仏は、一本一本の柱であり、それは私に向け
られた「励ましの声」とも、言えるでしょう。

念仏と共に歩む人生
は、人生のゴールが明ら
かになることです。そし
て、苦しみの中を乗り越
える力を与えて下さるこ
とでした。



築地本願寺報恩講

六名が帰敬式を受式

先日、築地本願寺で報恩講法要が勤まりました。当山で
は、十五日に十二名で参拝しました。今回は、六名が帰敬
式を受けられ、ご門主より法名をいただきました。

帰敬式とは、浄土真宗の入門式といえるもので、法名をい
ただくことができます。ある方が、「法名をいただいで、
気持ちがあたたまりました。」とおっしゃいました。

今年の御伝鈔『現代語訳』

第一段 第二段

ほんがんにじしやうにんしんらんでんね
本願寺聖人親鸞伝絵 上

【一】 そもそも、親鸞聖人の在俗当時の姓は藤原氏でした。

藤原氏は先祖が天児屋根尊で、それから二十一代目の子孫が、

太織冠位を与えられた藤原鎌足大臣で、その「やしや孫」、

つまり四代目の子が近衛大将右大臣従一位藤原内膳公でした。

この人は後長岡大臣とも、閑院大臣とも号して、贈正一位

太政大臣房前公の孫に当り、大納言式部卿真楯の息子です。

その内膳公から数えて六代のちの孫が弾正大弼と参議を兼ね

た有国卿で、更にその有国卿から五代のちの孫が、聖人の父

君有範様です。この方は皇太后宮で大進という役職をつとめ

られました。ですから聖人は、朝廷に仕官して天皇の御側近

くに仕えたり、仙洞御所の中を忙しく走りまわったりして、

高い地位に昇り、栄華をきわめるべき人であったのでしたが、

仏法を興し、衆生に利益を与える因縁が内外に芽ばえたので

しよう、数え年九歳の春に、伯父で養父となっていた従三位

日野範綱卿につれられて、前大僧正慈円のご住居へうかがい

ました。範綱卿はこのころは従四位上という位で、若狭守の

役職は降りていましたが、後白河上皇に側近として仕えてい

ました。慈円は歿後は慈鎖和尚とも呼ばれた人で、父は関白

藤原忠通、兄には九条兼実がいます。聖人はその慈円の住居

で髪を剃り落し、僧となられたのでした。法名は範宴、号を
少納言公と申しました。それから、中国天台宗の南岳大師
慧思や天台大師智顛が広めた奥深い道を研究し、空・仮・中
の三種の観法によって、生きとし生けるすべてのものがさと
りをひらくとする教義を理解しました。そして比叡山横川の
首楞嚴院に永遠に伝わっている恵心僧都源信の法流を受け
ついで、釈尊一代の教説を、蔵・通・別・円の四教に分け、
その一切が『法華経』にまどかにそなわっているとすると天台
宗の教義に精通するようになったのです。

【二】 第二段

建仁元年（一一〇一）春のころ、二十九歳だった親鸞聖人

は、比叡山での栄達の望みを捨て、念仏門に帰したいとの切

なる願いから、法然上人（源空）の吉水のご住房を訪れられ

ました。これはお釈迦様が入滅せられてから二千年以上がた

ち、仏法が衰えるという末法の世の中になった今、人間の資

質も劣弱になって、実践のむづかしい自力の修行では迷って

しまふことが多いから、修めやすい他力の道を進もうとせら

れたからでした。真実の宗教を盛んにせられた元祖の法然上

人は、親鸞聖人に宗旨の根源のすべてにわたり、聖教のす

じみちを究極にまで述べ伝えられたところ、聖人は阿弥陀如

来の本願他力によって教われるという趣旨をたちどころに会

得し、凡夫がそのまま真実報土に往生せしめられる、との信

心をすっかり確立せられたのでした。